

ドイツ統一と大学改革

——改革前史の東ドイツ社会学者ライフヒストリーの分析——

愛知大学 飯島幸子

1 目的

本報告では、ベルリン・フンボルト大学の社会学者 42 名のライフヒストリーより、ドイツ統一（die deutsche Wiedervereinigung）、そして大学改革（die Universitätsreform）以前の旧東ドイツ（DDR）時代の語りに焦点を当てた分析を試みる。ドイツ統一は事実上、旧東独の旧西独への併合であり、東側社会システムの諸相には無批判のうちに西側システムが強力に導入される結末となった。大学もしくは学界の領域も例外でなく、その結果、大多数の東出身の社会学者にとって統一後の大学改革は職業キャリア上の大きな転換点として作用した。従来、統一以後、そして大学改革以後の彼らの進路と適応の過程に関する分析を中心に報告を重ねてきたが、ドイツ統一という社会変動および大学改革という社会史上の出来事が大学研究者らに及ぼした影響の大きさを明らかにした今、改革前史となる DDR 時代を通じた彼らのライフヒストリーに目を向け、検討したい。この分析により、DDR 時代の大学および大学研究者の経験の中に見られる特徴や特異点を整理し、統一後の大学改革がなにゆえ彼らに大きな困難をもたらさず結果となったかをあらためて考察する。

2 方法

ドイツ統一後の大学改革は R.マインツらによって問題化され、彼らの短期プロジェクトの成果は重要な先行研究として挙げられる。しかし、このテーマをめぐる諸研究は 1997 年頃には終息し、その後、何らかの追跡調査をともなった研究は行われなかった。また、大学改革をめぐり「同時期に同じ大学に在職した社会学者」という特定の集団を対象に横断的な調査と聞き取りを行った研究事例はなく、フィールドワークによって得られた一次資料に基づく分析は本研究の独自性の一つと呼べる。収集したライフヒストリーには 3 つの時期区分がもうけられ、本報告はそのうちの第一期、DDR 時代から「変動期（die Wende）」までを扱う。

3 結果

DDR 時代、ベルリン・フンボルト大学の社会科学系領域には社会学研究科、マルクス・レーニン主義学科、平和・紛争研究科の 3 つの部署が存在しており、別個の独立した組織を形成していた。任期の定めがない安定的雇用条件のもと、外部からの人材や、あるいは他分野での来歴ある人材も登用しつつ、予定調和的かつ緩やかな新陳代謝が行われていた。当時、社会学は未来ある新領域で、モスクワ大学留学は一種のエリート・コースに乗ることを意味していた。また、西側では考えられないほど恵まれた割合の教職員が配置される一方で、研究環境には冷戦下ならではの制約も存在していた。

4 結論

統一時点でベルリン・フンボルト大学に在職していた調査対象者らは、換言すれば、DDR 時代の社会体制に順応し、いわば成功してきた人々である。DDR 当時、彼らが当然のこととして受け止めてきたさまざまな要素のうちの何が後の大学改革の嵐の中で問題となり、研究職を継続する上での困難をもたらしたのかを考察し、第二期以降の分析へと架橋する。

文献

Mayntz, Renate (Hg.), 1994, *Aufbruch und Reform von oben: ostdeutsche Universitäten im Transformationsprozeß*, Frankfurt/Main: Campus Verlag.

ほか